

- 所在地** 宮城県栗原市築館字城生野唐崎、地藏堂、大堀、要害地内
- 立地環境** 築館丘陵南端部の標高約 20 ～ 25 m の河岸段丘上
- 発見遺構** 掘立柱建物、竪穴建物、掘立柱塀、築地塀、土塁、大溝、道路、土坑、土器埋納遺構ほか
- 年代** 8 世紀後半～9 世紀前葉

## 遺跡の概要

伊治城跡は奥羽山脈から派生した築館丘陵東端の河岸段丘上に立地しており、北側には二迫川、南から東にかけて一迫川が流れている（第 1 図）。西側には大きな沢が入り込み、周囲から隔絶される。周辺の水田面との比高差は 6 ～ 7 m ある。これまでの調査成果と地形からみて、遺跡の規模は東西 700 m、南北 900 m とみられる。

伊治城は神護景雲 3 年（767）に創建された。創建年代がわかる城柵であり、宝亀 11 年（780）に「伊治公皆麻呂の乱」が起こった場所として知られている。

### 1. 発掘調査成果の概要

これまでの発掘調査により、伊治城跡の構造は外郭、内郭、政庁がそれぞれ区画施設により囲まれる「三重構造」であることが判明した（第 2・3 図）。伊治城跡の遺構の変遷は以下になる。

- ①火災にあっていない建物 = 政庁Ⅰ期創建期（767 年～）で火災前に建替え
- ②火災にあった建物 = 政庁Ⅱ期（～780 年）
- ③火災後に造営された建物 = 政庁Ⅲ期（780 年～）火災後の復興とその後造られた施設

以下、遺構を中心に調査概要を紹介する。

### 2. 政庁（第 13、17、19、39、42、44、46、48 次）

政庁は伊治城跡内の中央南寄りに位置する。区画施設は基底幅 1.5 m の築地塀で、南辺、北辺、西辺で確認されている。南北の規模は約 60 ～ 61 m、東辺は未確定であるが東西約 62 m と想定される。

政庁からは正殿、築地塀に取りつく北殿（北門を兼ねる）、西脇殿、東脇殿とみられる柱穴、南門、目隠し塀、広場が確認され、創建以来ほぼ同位置で建て替えられる主要な構成要素である（第 6 図）。西脇殿では中央の広場側に 2 間の縁が取り付け、東脇殿推定地では縁とみられる柱穴が確認された。前殿は創建段階のみに認められる（火災前に解体）。正殿北方の建物群は政庁Ⅱ期～Ⅲ期のものである。

政庁内の建物は 3 時期の変遷が確認される。2 時期目の建物が火災に遭っており、宝亀 11 年（780）の事件に起因すると推定される。西脇殿の縁では 3 時期の重複が確認され、2 時期目の柱穴の掘方埋土内に焼土や炭化物が認められる。西脇殿が火災の後に建て替えられた後にもう一度建て替えられていることを示す。北殿では 4 時期の変遷が確認されている。内郭でも同様な掘立柱建物がある。まだ確定ではないが、政庁、内郭では火災後に 2 度の建替えの可能性がある。



第 1 図 伊治城跡・入の沢・城下遺跡ほかの位置

正殿（SB152a、b）は桁行 5 間（総長 15 m）、梁行 2 間（3 m 以上）以上の建物である。火災にあった SB152a は周囲を SD225 に囲まれる。SB152 から約 1.5 m 離れた位置にあり、SD225 内から板材の痕跡が確認されたことから木製基壇と考えられる。また、ほぼ同位置で SB152a より古い桁行 5 間梁行 2 間の SB246 が確認されているが伊治城跡の変遷に位置づけられておらず、現在までのところ時期や性格は明確ではない。I 期の正殿である場合、SB152 は 2 間（6 m）分西側にずらして建てられたこととなる。

政庁域の特徴的な遺物の一つに瓦がある（第 5 図）。瓦は伊治城跡内で散発的に出土するが、政庁周辺で多く、火災の跡片付けを行った遺構からの出土が多い。これまで出土した瓦の総数及び総重量をまとめたのが第 1 表である。正殿の北半が確認された第 17 次調査区から突出した数が出土している。遺構別でみると正殿である SB152 周辺で多量に出土しているので、SB152 のみが瓦葺の建物である可能性が高いとみられる。平瓦、丸瓦、軒丸瓦があり、出土した瓦の総重量から屋根すべてに瓦を葺いたとは考え難く葺棟など部分的に葺いたと想定されるが、どのように瓦を葺いたのかは今後の検討課題である。

### 3. 内郭（第 7、11、13、15、20、21、35、36、40、41、43 次）

内郭は伊治城跡内の中央南寄りに位置する。政庁域は内郭区画施設により囲まれており、掘立柱建物群、道路などが確認されている。実務官衙域（曹司）とみられる。

南北約 245 m、東西 185 m の範囲を平行四辺形に囲む内郭区画施設が確認されている。政庁と同様 2 条の溝が平行して確認されており、2 条の溝の間に区画施設が推定される。基底幅 2.4 m の築地塀である。これまでの調査で北西隅（第 7・11 次）、西辺（第 13・20・40 次・令和 3 年度現状変更）、南東隅（第 20 次）、北辺（第 21 次）で確認されている。また、外郭南辺の調査（第 31・33 次）、内郭西辺の南側（平成 26 年度現状変更）では外郭南辺から北側につづく築地塀本体および基底部を発見した。この築地は内郭西辺の南延長にあたる。火災以後に南に内郭が拡大したか、「南郭」とよべる区画が設けられた可能性が考えられる（第 4 図）。

内郭域では掘立柱建物が集中して確認される範囲がある。具体的な内容は不明な点が多いが、実務官衙である。北西ブロックでは掘立柱建物群→堅穴建物となり、場の性格が変化する。

政庁南面では築地塀に囲まれる建物群が政庁南門に至る幅 16.6 m の南大路の東西で確認されている。

### 4. 外郭（第①次、第 12、16、22、23、24、25・26、29、30、31・33、32・34、47、48 次）

伊治城跡の最も外側に位置する外郭の区画施設は、段丘崖に沿うように東西 700 m、南北 900 m の範囲を地形に合わせて築地塀や土塁などで囲んでいる。外郭内では内郭北辺を境として、北側で堅穴建物群と 2 間×2 間の小規模な掘立柱建物、南側で掘立柱建物と堅穴建物が確認されている。

確認された外郭区画施設は以下のとおりである。

#### 【北辺】（第①次、第 12、24 次、第 7 図）（註 1）

遺跡の北側、大堀地区には上幅約 18 m、深さ 4 m の溝状のくぼみが長さ 200 m にわたり現存し、大溝の南と北で土塁状の高まりがある。外郭北西部にも昭和 30 年代後半まで残存していた。

第①次調査で確認された大溝の規模は上幅 10 m、土塁天端間で約 18 m、深さは現在の堀底より 3.3 m、北側の土塁の上から約 5 m の規模であり、箱掘りから薬研掘り状に掘り直されたとみられる。また、北側の土塁は基底幅 7.5 m で地山削出しのないしは整地により造出し、この基底幅の中央に幅 3.5～4 m、深さ 1.4～1.7 m ほどの溝を掘り込み、埋め戻して土塁を構築している。同様の工法は加美町早風遺跡 SF301 土塁（東山官衙の外郭区画施設、宮城県教委 2007）で検出されている。

#### 【東辺】（第 16 次、20 次北区、25・26 次、平成 28 年度個人住宅）2 条の溝状遺構。

【西辺】（第 23、34 次）西側で大溝。東側に 2 条の土取りの溝状遺構。

【南西隅付近】（22 次）西側で大溝。東側に 2 条の土取りの溝状遺構。

【南辺】（第 29、30、31・33 次、第 9・10 図）

築地崩落土が確認された土取りのための土坑や土取り溝が確認された。第 31・33 次調査では平行する 2 条の溝が重複して確認され、新段階の築地本体積土が残存していた。基底幅 2.8 m の築地塀である。外郭南辺区画施設は火災以前より築地塀であり、火災後には位置をずらして構築された。これは外郭区画施設の位置が移動することを示している。また、外郭区画施設に取り付く施設（第 23、31・33 次）は外郭南門（2 棟）、櫓（2 棟）があり、同位置か位置を変えて建て替えられる（第 9 図）。

なお、北辺と南西隅付近では外郭区画施設の北側で古代の溝が確認されており、外郭区画施設は時期によって複数（多条化）あった可能性がある。

外郭域の様相は内郭北辺とその延長線を境として、南半部と北半部では様相が異なる。

外郭北半部（第①～③次、第 1～6、8、9、16、20、23、24、32・34、48 次）で竪穴建物が約 100 棟確認されており（第 8 図）、このほか桁行 2 間、梁行 2 間の小規模な柱穴の掘立柱建物、井戸などが確認されている。北半部は、竪穴建物で構成され居住域と考えられる。墨書土器に「城厨」（SI04 など）、「常陸口」（SI12）などが出土している。地点によって遺構の密度に違いがある。

内郭北西隅付近に接続する東西方向の溝のある南半部（第 13、14、20、22、25～30、31、33 次）では竪穴建物のほか大型の掘立柱建物が検出されている。実務官衙域であったとみられるが各地点で確認される遺構の構成が異なり、担った実務は異なる可能性が高い。特に内郭南辺中央部の南では掘立柱建物のみで構成されるとともに遺構が重複することから、外郭南半部のなかでも特に重要な官衙であったと考えられる（第 27 次）。

## 5. 伊治城跡周辺での最近の調査成果

近年、伊治城跡の周辺で行われた発掘調査により、城外の様相が判明してきた。

### 【城外への官衙域の拡大】

個人住宅建設に伴う調査で外郭南西部の南側、丘陵裾部で確認調査を行ったところ 1 辺 1 m の柱穴で構成される柱列を確認した（栗原市教委 2019）。掘方に焼土が含まれるのでⅢ期の可能性がある。外郭区画施設の外側と想定される丘陵裾部に官衙関連の遺構が広がることが考えられる。

### 【伊治城周辺の集落】

ほ場整備事業に伴い伊治城跡北東の自然堤防から竪穴建物が確認された（城下遺跡）。SI16B は焼失しており、8 世紀後半（火災前後）のまとまった資料が得られている（栗原市教委 2014、第 12 図）。

伊治城跡南西の丘陵上に位置する入の沢遺跡において 8 世紀後半頃から 10 世紀の集落が確認された。古墳時代前期の大溝上層から古代の遺物が出土することから古代においてもくぼんだ状態であった。また、土塁状遺構や櫓の可能性が高い掘立柱建物が確認されている（第 13 図）。

### 【周辺集落での円形有段遺構の確認】

伊治城跡の周辺にある鶴ノ丸館遺跡と泉沢 A 遺跡から円形有段遺構が確認されている（第 11 図）。性格は「氷室」（中山 2001）や「烽火」（古川 2012）などの説がある。伊治城跡から類似する遺構は確認されていない。宮城県内でも類例が少なく、今後類例が増加し研究が進展することが期待される。

註 1 調査回数における①～③次は多賀城跡調査研究所、その他は築館町教育委員会や栗原市教育委員会によるものである。

## 関連文献

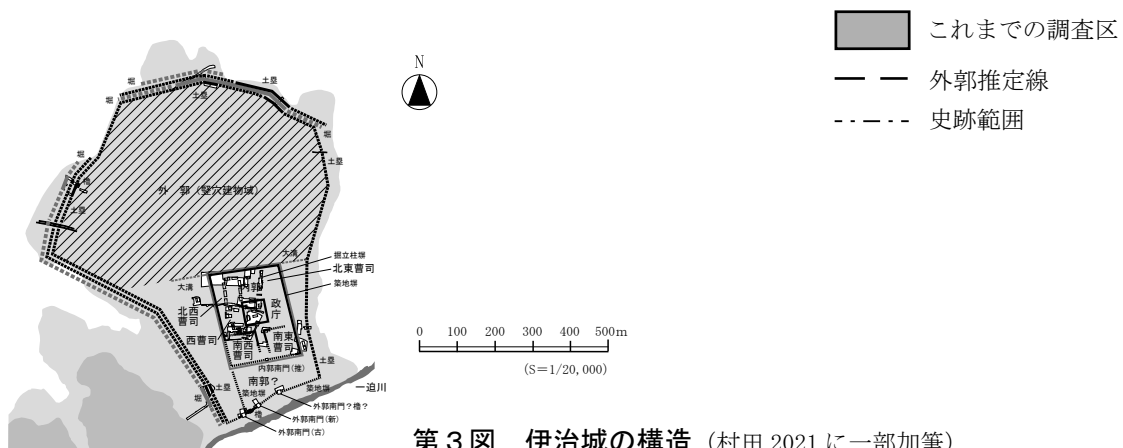
### 【論文等】

- 安達訓仁 2016「発掘調査成果からみた伊治城と古代栗原郡」『東北学院大学アジア流域文化研究所公開シンポジウム 栗原市伊治城跡から読み解く古代東北史』
- 安達訓仁 2021「古代栗原郡の集落と赤彩土器」『北上市立博物館研究報告』第22号
- 五十嵐基善 2012「古代日本の弩に関する基礎的研究－その構造と運用を中心として－」『文学研究論集』第37号 明治大学大学院文学研究科
- 池内儀八 1929「東北に於ける上古の城柵遺蹟」『東北文化研究』第2巻第1号
- 佐藤敏幸 2015「東北の城柵官衙と土器」『第18回 古代官衙・集落研究会報告書 官衙・集落と土器1－宮都・官衙と土器－』奈良文化財研究所研究報告第15冊
- 千葉長彦・後藤秀一 2001「伊治城跡発掘調査の成果」『第27回古代城柵官衙遺跡検討会資料』
- 築館町史編纂委員会 1976『築館町史』
- 中山晋 2001「氷室研究の現状と課題」『研究紀要』第9号 財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター
- 廣谷和也 2014「東北地方の重圏文軒丸瓦」『古代瓦研究VI－重圏文系軒瓦の展開－』古代瓦研究会シンポジウム記録』
- 古川一明 2012「古代城柵官衙遺跡の烽燧についての試論」『宮城考古学』第14号
- 村田晃一 2004「三重構造城柵論－伊治城の基本的な整理を中心として 移民の時代2－」『宮城考古学』第6号
- 村田晃一 2015「版図の拡大と城柵」『東北の古代史3 蝦夷と城柵の時代』
- 村田晃一 2016a「律令国家の拡大と城柵－伊治城跡と桃生城跡の成果を中心に－」『東北学院大学アジア流域文化研究所公開シンポジウム 栗原市伊治城跡から読み解く古代東北史』
- 村田晃一 2016b「陸奥国北辺における城柵の造営と集落・土器－加美郡と栗原郡の様相から－」『第19回 古代官衙・集落研究会報告書 官衙・集落と土器2－宮都・官衙・集落と土器－』奈良文化財研究所研究報告第18冊
- 村田晃一 2021「城柵と赤彩球胴甕－境界域の城柵と蝦夷－」『北上市立博物館研究報告』第22号
- 柳澤和明 2010「桃生城跡と伊治城跡」『考古学ジャーナル』604号

### 【発掘調査報告書】

- 栗原市教育委員会 2006『泉沢A遺跡』栗原市文化財調査報告書第2集
- 栗原市教育委員会 2006～2022『伊治城跡』栗原市文化財調査報告書第1、4、7、9、11、13、17、19、30集
- 栗原市教育委員会 2014『城下遺跡』栗原市文化財調査報告書第18集
- 栗原市教育委員会 2015b『史跡 伊治城跡』栗原市文化財パンフレット第8集
- 栗原市教育委員会 2019「伊治城跡」『令和元年度宮城県遺跡調査成果発表会』発表要旨
- 栗原市教育委員会 2019、2020『入の沢遺跡』栗原市文化財調査報告書第26、28集
- 栗原市教育委員会 2021『大仏古墳群』栗原市文化財調査報告書第29集
- 栗原市教育委員会 2022b「伊治城跡」『令和4年度宮城県遺跡調査成果発表会』発表要旨
- 築館町文化財保護委員会 1969『伊治城跡出土遺物目録』伊治城跡資料第1集
- 築館町文化財保護委員会 1970『伊治城跡出土遺物目録並文献資料』伊治城跡資料第2集
- 築館町教育委員会 1988～2002・2003～2005『伊治城跡』築館町文化財調査報告書第1～15、17、19集
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1978～1980『伊治城跡Ⅰ～Ⅲ』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第3～5冊
- 宮城県教育委員会 1981「鶴ノ丸遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅴ』宮城県文化財調査報告書第81集
- 宮城県教育委員会 2007「早風遺跡」『早風遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第213集
- 宮城県教育委員会 2016・2022『入の沢遺跡』宮城県文化財調査報告書第245、251集







第4図 伊治城政庁・内郭遺構模式図 (栗原市 2015b を一部改変)

		瓦総数 (点)	瓦総重量 (kg)	
政庁	13次	16	1.4	
	17次	1507	167.6	※1
	19次	115	13.9	
	44次	102	3.9	※2
内郭	7次	5	2	
	11次	1	4.8	
	20次	66	38.5	※3
	21次	217	41.3	※4
	22次	6	0.8	
	36次	14	8.4	
	40次	2	0.4	
	41次	45	5.1	※5
	43次	165	13.4	※6
	軒丸瓦	33		

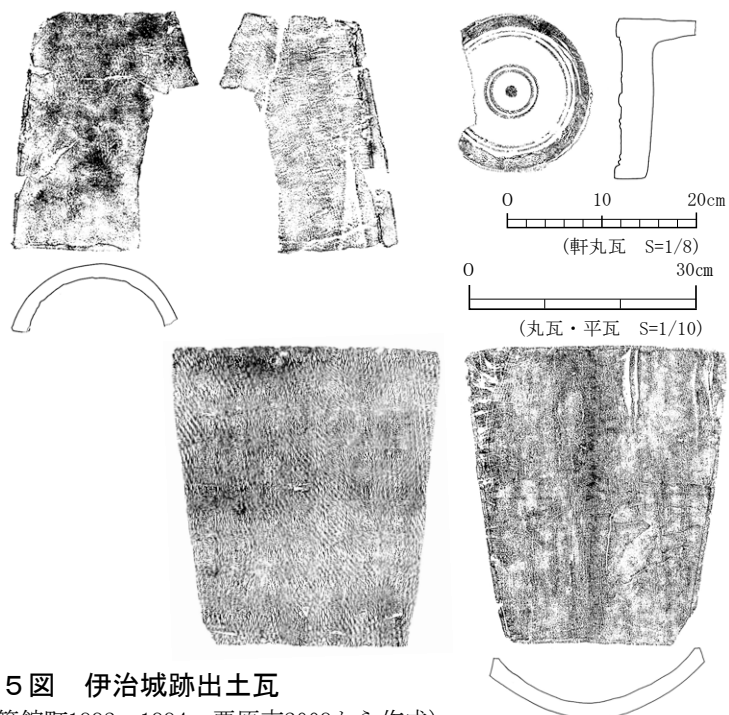
※1・2 正殿周辺

※3・4 SIカマド構築材(完形に近い)を含む

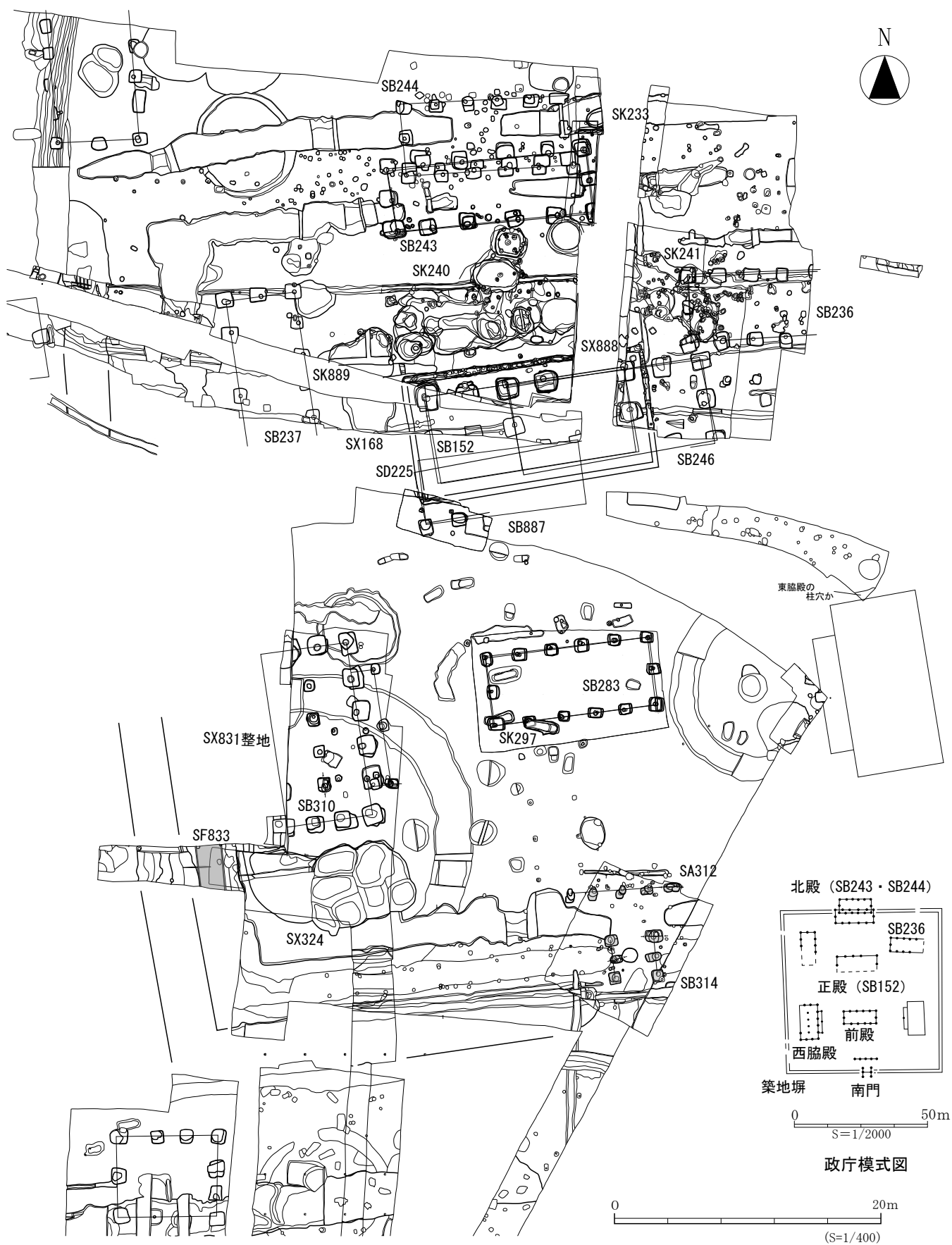
※5 瓦総数は平瓦・丸瓦

※6 SX869から多く出土した

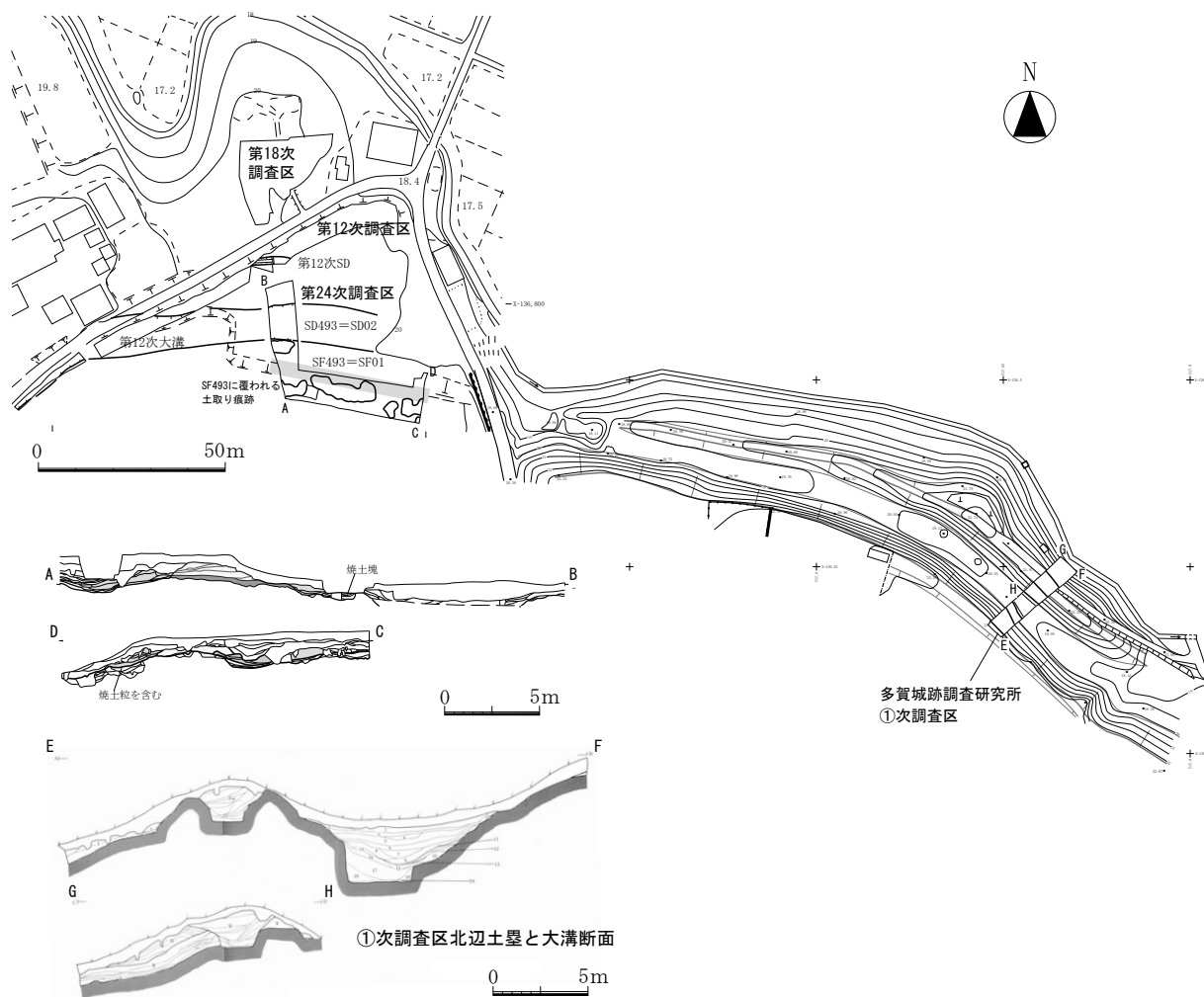
第1表 伊治城跡の古代瓦  
(安達2016に最新データを加筆)



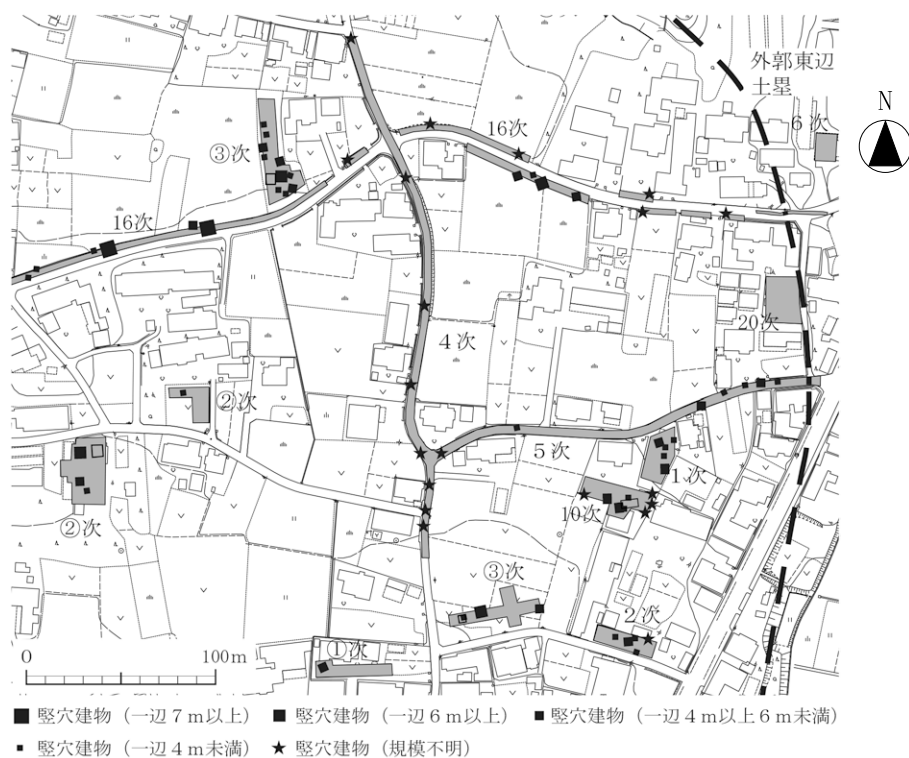
第5図 伊治城跡出土瓦  
(築館町1992・1994、栗原市2009から作成)



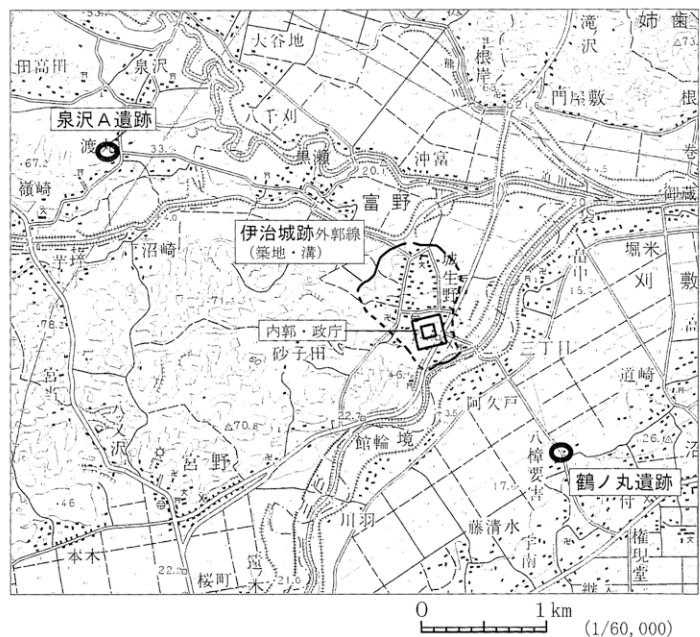
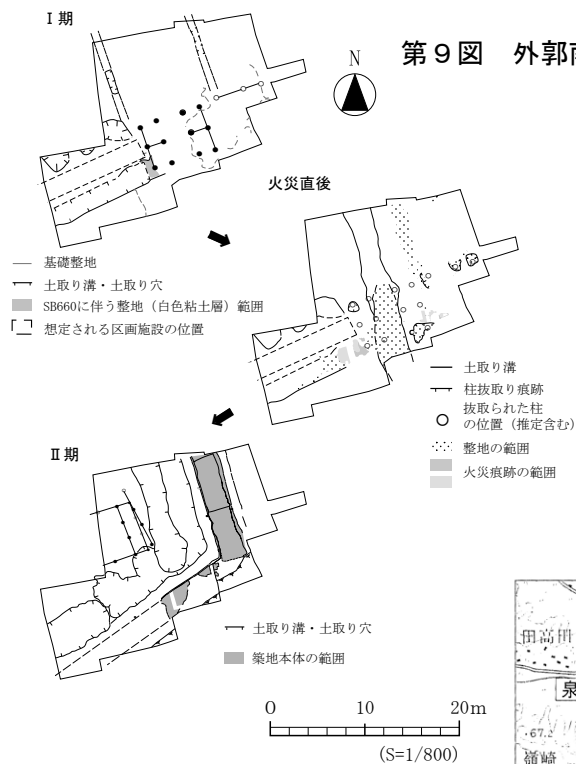
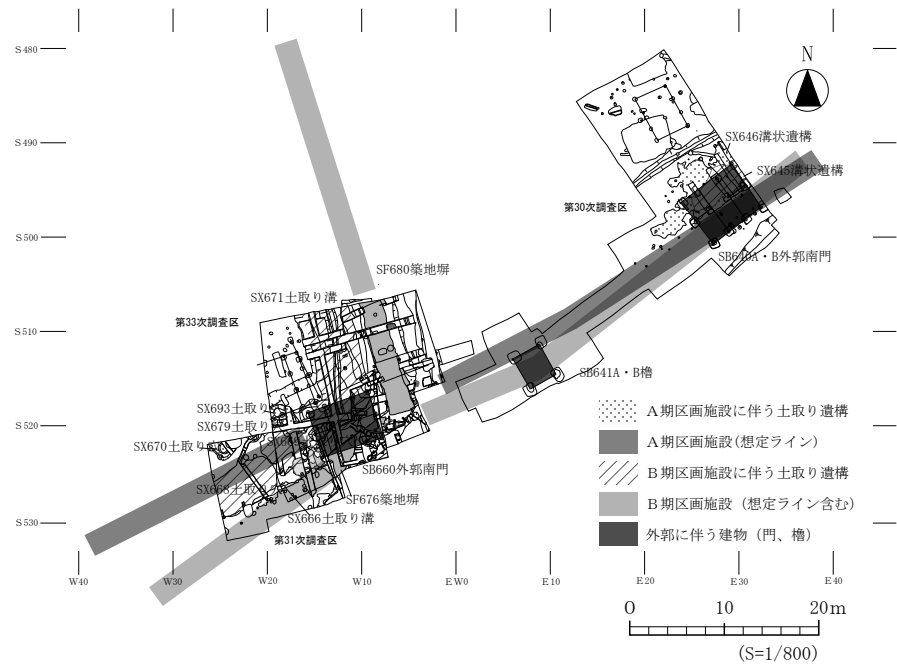
第6図 伊治城政庁跡 (栗原市 2022 を一部改変)

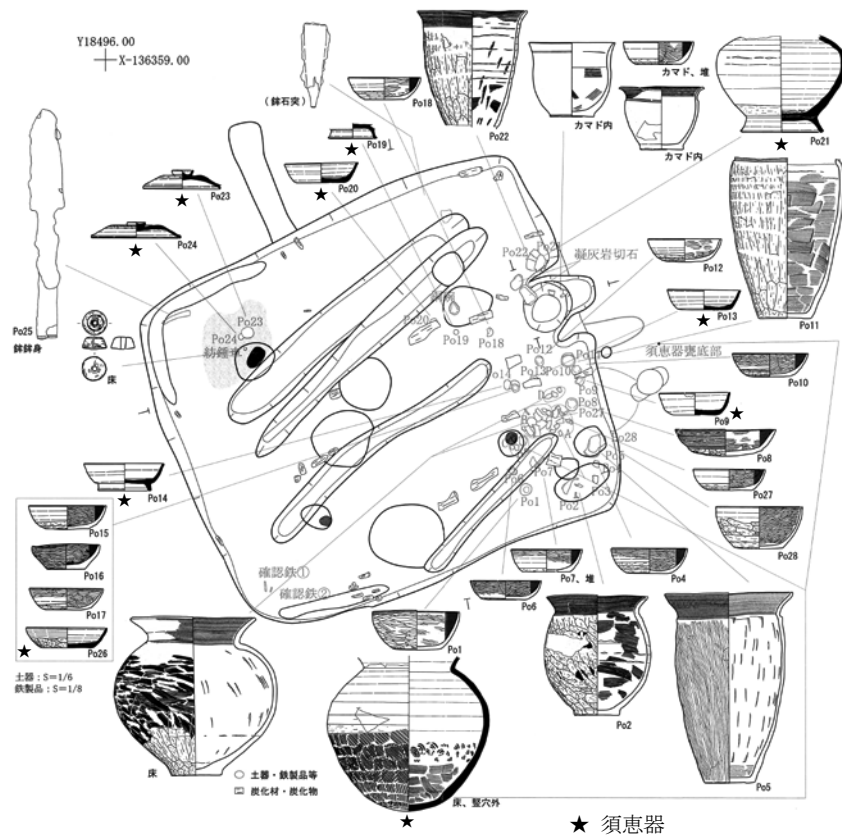


第7図 外郭北辺中央の区画施設（安達 2016 を改変）



第8図 外郭北東部の竪穴建物の分布（村田 2015）





第 12 図 城下遺跡 SI16B 竪穴建物床面遺物出土状況（栗原市 2014）

